新宗連スローガン
信教の自由を守ろう
信仰心を広めよう
宗教協力を進めよう
世界の平和に貢献しよう

新宗教新聞

2018年（平成30年）
6月30日
第1103号

発行所
新日本宗教団体連合会
（略称 新宗連）
〒151－0053
東京都渋谷区代々木5丁目57番10号
電話（03）3468－5551（代表）
（03）3468－5588（編集）
大阪事務所 〒550－0006
大阪市西区江之子島1丁目8番21号111
電話（06）6443－7178

新理事長に岡田光央氏

新宗連 第30期役員体制が決定

理事会
評議員会

満場一致で選任された岡田新理事長（中央）が就任あいさつを述べた

岡田光央理事長

常務理事 御木貴日止氏が新任

新日本宗教団体連合会（新宗連）は6月26日午後、東京・杉並の立正佼成会法輪閣で、第29期第4回評議員会と第30期第1回理事会を開催。理事会では理事長らの選任を行い、新理事長には岡田光央理事（70、崇教真光三代教え主）が新任し、第30期の体制が決定した。常務理事には御木貴日止氏（パーフェクト リバティー教団教主）が新任した。

評議員会は午後2時から開会。互選により、澤田晃成評議員を議長に選出し、議事に入った。第29期第3回評議員会（書面評決）で新たに評議員に就任した上本広人氏があいさつした。

6月12日の第29期第7回理事会（別掲）で承認された平成29年度事業報告案並びに決算報告案について審議し、原案通り承認した。この後、第30期役員の選任に移り、役員等候補選考委員会の中村史郎委員長が委員会の協議を経て作成した第30期理事候補者を提案。審議の後、24人の理事を選任した。新理事は、御木貴日止氏と佐々木堯章氏、中田信和氏、新監事は赤松好美氏。また、仙波達治氏が新たに評議員に選任された。

午後3時15分から、評議員会で選任された理事による第30期第1回理事会が開催され、保積秀胤前理事長を仮議長に、第30期理事長と常務理事の選任を行い、新理事長に岡田光央氏、常務理事には宮本惠司氏、江口陽一氏、石倉寿一氏、川端健之氏（再任）、御木貴日止氏（新任）の5氏を満場一致で選任。新任となった御木氏があいさつを述べた。

新旧理事長のあいさつでは、2期4年にわたり理事長を務めた保積秀胤氏が、歴代理事長からの薫陶、東日本大震災では仙台市に本部を置く大和教団に対し加盟教団からの支援、また新宗連が展開した北朝鮮による拉致問題への取り組み（『栞』参照）などを振り返り、感慨を述べた。

そして新宗連の歴史を築いてきた先達への思い、理念を語り、「世の中の人々の悩み、苦しみを、先頭を切って救う新宗連でなければなりません」と述べた。

また、岡田理事長は就任にあたって抱負を述べた（要旨、別掲）。

続いて名誉会長と顧問の選任を行い、新任では保積前理事長を顧問に選任した。

また、日本宗教連盟の役員等の推薦について審議し、第30期各委員会・機関の委員及び幹事と委員長の委嘱を行い閉会した。

岡田理事長就任あいさつ（要旨）

新宗連スローガンのもと
混迷の時代に対応し実践

この度、理事の皆様のご推挙を賜り新宗連第8代理事長に就任いたしました。

新宗連は1951（昭和26）年10月17日、「信教の自由」の精神の堅持を第一に掲げ、新しい日本と世界の平和を築いていくことを共通の願いとして、24教団によって結成されました。これまで多岐にわたる諸活動を、加盟64教団、全国の総支部・協議会で67年間、先師先達の願いを受け継ぎ、展開してまいりました。

現代はグローバル化、高度情報化社会が進展する中で、国内外にわたり世界が一つになりつつも、次々と多種多様な問題が巻き起こり、混迷の様相を深めております。このような時代に、私たちが新宗連スローガンの基本理念のもと、具体的に何に取り組むべきか、皆様のご意見を伺いつつ、その対応の実践へ向けて歩みを進めて参りたいと存じます。

3年後の2021年、新宗連は結成70年という佳節を迎えます。私は第8代理事長として、あらためて新宗連の歴史を顧み、結成の精神を引き継ぐとともに、宗教協力を通して世界平和の実現に向け、新宗連の役員並びに全国の新宗連に集う皆様方とともに宗教協力の大道を歩んでまいりたいと存じます。

第29期第7回理事会―事業報告と決算を承認

6月12日 PL大本庁で開催

新宗連（保積秀胤理事長）は6月12日午後2時から、大阪府富田林市のパーフェクト リバティー教団（PL）大本庁・錬成会館で第29期第7回理事会を開催した。

はじめにPLの清島啓治郎理事長の受け入れあいさつの後、保積秀胤理事長が議長となり、開会。

報告事項では、信教の自由委員会委員長の本山一博理事が「第5回現代社会と信教の自由公開講座」（3月9日）、企画委員会委員長の田澤清喜理事が「第5回新生復興祈念集会」（5月16、17日）、仙波達治宗教法人研究会座長が「第81回拡大宗法研」（4月19日）について報告。また、企画委員会副委員長の力久道臣理事は「熊本地震第3次支援活動」の終了報告と、今年10月16、17日に熊本市で開催する全国総会の概要を説明した。

続いて、新宗連青年会委員長に就任した宮口弘道委員長が就任あいさつと、第30期役員の紹介及び今後の青年会主催行事の概要を説明した。

PL大本庁・錬成会館で開かれた第7回理事会

審議事項に移り、平成29度事業報告案と同決算報告案が上程され、原案通り承認した。

中村憲一郎会計委員長が今後の新宗連活動に関わる財政基盤安定のため「資産運用規程」を上程し、原案通り承認。

また、理事長の諮問機関「将来構想検討プロジェクト」の中間報告書について、同プロジェクト座長の宮本惠司常務理事が経過と概要を述べ、組織事業部会長の石倉寿一常務理事、財政部会長の中村会計委員長が現在の新宗連活動における課題、それに対する検討結果及び確認事項を説明。今後も検討を継続し、1年後を目処に最終報告書を取りまとめ、提出することなどを確認、承認した。

理事会前にはPLの御木貴日止教主主催による趣向を凝らした野外での昼食会が催され、理事会出席者をもてなした。

【訂 正】前号1面「石倉恒男師が逝去」の記事中、4段10行目「76年（同51）年」は「93（平成5）年」の誤りにつき、訂正しお詫びいたします。

≪新宗連第30期役員・評議員≫

新宗連役職	氏名	教団役職
名誉会長	深田 充啓	円応教教主
顧問	庭野 日鑛	立正佼成会会長
顧問	新井三知夫	救世真教顧問
顧問	力久 隆積	善隣教聖主
顧問	岡野 聖法	解脱会長老
顧問	保積 秀胤	大和教団教主
理事長	岡田 光央	崇教真光三代教え主
常務理事	宮本 惠司	妙智會教団法嗣
同	江口 陽一	大法輪台意光妙教会理事長
同	石倉 寿一	大慧會教団次代会長
同	川端 健之	立正佼成会理事長
同	御木貴日止	パーフェクト リバティー教団教主
理事	田澤 清喜	松緑神道大和山教主
同	新井 光興	救世真教会長
同	赤銅 重夫	円応教理事長
同	嘉納 良樹	日月神一条管長
同	本山 一博	玉光神社宮司
同	鉢呂 神龍	天恩教教主
同	田中 庸仁	真生会会長
同	力久 道臣	善隣教教主
同	飯島 法道	思親会会長
同	深田 惠子	円応教恵主
同	庭野 光祥	立正佼成会次代会長
同	保積 志胤	大和教団統理
同	出居 徳久	修養団捧誠会総裁
同	北浦 幸代	祖神道教団理事
同	渡辺 孝彦	解脱会理事長
同	藤原 裕康	妙道会教団理事長
同	佐々木堯章	崇教真光事務局長
同	中田 信和	パーフェクト リバティー教団理事
監事	番重 賢嘉	妙智會教団理事
同	赤松 好美	PL東京健康管理センター 総務課長代理
評議員	石川 靖夫	霊波之光教会代表役員
同	眞塩陽一郎	七曜会教主
同	加納 理孝	加納太霊教院院長
同	保積 敬子	大和教教祖
同	齋藤賢一郎	妙智會教団理事長
同	古川 謙一	思親会責任役員
同	髙橋 秀典	大慧會教団理事
同	榊原 隆三	法公会総務部長
同	左藤 滋光	澄禅律院住職
同	宮坂 保徳	解脱会理事
同	平松 千明	大和教団総監
同	山本 行德	八津御嶽神社宮司
同	中村 史郎	円応教副理事長
同	木村 吉宏	大法輪台意光妙教会事務局長
同	澤田 晃成	立正佼成会総務部長
同	上本 広人	パーフェクト リバティー教団理事
同	仙波 達治	崇教真光恢弘部長補佐

栞（しおり）

北朝鮮による拉致問題への取り組み

新宗連は平成29年度の事業計画の中で、重点事業の一つに、北朝鮮による日本人拉致問題への理解と関心を高めることを掲げた。昨年3月には、拉致被害者の即時帰国を求める要望書と署名簿を安倍首相に提出。翌4月から今年2月にかけて、全国の8総支部・28協議会で学習会を開催。また、北朝鮮をめぐる緊張が高まっていた昨年11月には東京・九段の国立・千鳥ケ淵戦没者墓苑で「共に祈ろう！北朝鮮情勢の平和解決」を掲げた平和の集いを開催。約3,800人が参加し祈りを捧げた。（1面）

滴々抄

梅雨入りに日常振り返る

人間らしい生き方、生かされ方とは

梅雨に入ると、楽しみにしていることは梅酒造りです。時々こだわりすぎて失敗もしますが、出来上がる日を楽しみに、丹念に仕込みます。

お店に行くと沢山の種類の梅酒が店頭に並んでいますが、やはり自分で作ったシンプルな梅酒が一番好きと自画自賛しています。梅の実を一粒ずつ丁寧に拭き、芳醇な梅の香りを楽しみながら作ります。少し時間はかかりますが、自らが得心していればそれはそれでいいのです。

そうは言っても時間に追われる毎日で、料理でもすべてにこだわって、時間をかけて作れないのも事実です。でも、テレビをつけると、料理番組で、誰でも簡単に素早く作れる時短レシピを教えてくれます。それとスーパーに買い物に行けば、美味しそうに小分けにされたお総菜が並び、お皿に出せば、それだけでサラダになるカット野菜も売れているそうです。

しかし、ふと我に返ると、便利な掃除機、洗濯機、冷蔵庫などの機械に囲まれているのに、何故こんなに忙しいのだろうと実感するのが現実です。ある方が言われていましたが、これからはAIが活躍する人工知能の時代になるそうです。一体人間はどうなってしまうのだろうと思ってしまいます。

先日、子どもが通う学校で教えられたことは、これからは受験の時に知識と技術に加えて「思考力、判断力、表現力」が必要になり、そして「自ら求め、自ら考え、自ら計画実行する」―このような人を求める時代になるそうです。

機械に囲まれ何でも売っている便利な時代ですが、便利さに流されることなく、自分らしさを忘れないようにしたいものです。便利な世の中に変化しても、どれだけ早く出来たかではなく、どれだけ自分らしく出来たかを大切にしたいものです。

いつも人間らしい生き方、生かされ方を大切に、味わいある時間を過ごす生活を忘れたくないと、梅雨の雨音を聞きながら思います。

（深田惠子・円応教恵主）

宗教をめぐるさまざまな問題のご相談窓口
宗教もしもし相談室
03 3466-9900
受付●月曜→金曜／正午→午後4時
公益財団法人 新日本宗教団体連合会

緊急出版 カトリック大阪教区神父 西山俊彦
平和憲法が平和への道、改憲は戦争への道
―わたしたちが核戦争の加害者とならないために―
世が平和ボケにあろうとも、一時すでに遅し」と後悔しないために、平和憲法の真価を見直す素養まで捨てるわけにはいかない。
●1400円＋税 四六判並製
248頁 ISBN 978-4-286-19691-6
文芸社
〒160-0022 東京都新宿区新宿1-10-1
☎03-5369-2299 FAX.03-5369-3066
https://www.bungeisha.co.jp
書籍のご注文はお近くの書店またはブックサービス☎0120-29-9625、ネット書店まで

ハーベスト社
「世界救世教」に関する初めての本格的研究
療術から宗教へ
世界救世教の教団組織論的研究 隈元正樹著 本体価格3000円＋税
浄霊と称する療術で、第二次世界大戦以後に教勢を伸ばした世界救世教を事例として、呪的宗教の組織化を中心とした教団統合の問題を明らかにする。
近現代日本の宗教変動 実証的宗教社会学の視座から
寺田喜朗・塚田穂高・川又俊則・小島伸之編著 本体価格3800円＋税
西東京市向台町2-11-5
Fax042-467-8661 TEL042-467-6441

白馬社
合掌ができない子どもたち
浄土真宗本願寺派福賢寺住職 三上章道
四六判 定価1260円
『本願寺新報』の編集長を二十年に亘って務めてきた著者が、合掌ができない子どもたちとの出会いを契機に、戦後の日本社会が戦慄すべき―薄縁社会―となったプロセスを追い、その原因が宗教心の喪失にあることを解き明かす。そして新たに現出した「原発問題」にも、同根の原因があることを洞察していく。日本人の心の問題にするどく迫り、根本的解決への提言をまとめた必読書。
〒612-8469 京都市伏見区中島河原田町28-106
TEL 075(611)7855 FAX 075(603)6752
http://www.hakubasha.co.jp 価格税込

校成出版社
「宗教者の役割」「信仰の本質」を問う異色の評伝
〈大逆事件〉と禅僧内山愚童の抵抗
眞田芳憲
四六判／240頁 本体2000円＋税
日本近代史における最大の思想弾圧「大逆事件」に連座し、刑死した禅僧・内山愚童（1874～1911年）。社会主義者、無政府主義者としてこれまで語られがちであった愚童の思想と行動を、本書は仏教者としての側面から仔細に検証。その知られざる実像を明らかにする。
〒166-8535 東京都杉並区和田2-7-1
☎03(5385)2323 FAX03(5385)2334
http://www.kosei-shuppan.co.jp/

南雲堂
美容と健康寿命の秘策！
認知症予防★お口の体操
『みんな笑顔、みんな元気！』DVD
監修・作詞：太田哲二 作曲：森重恭典／歌・実演：恵中瞳
（体操解説・歌詞収録のブックレット付）
定価（本体2000円＋税）
●収録内容（歌と体操の実演）
■アッカンベー体操／舌の動きや首を回して、筋肉を活性化させて、リンパの流れを良くする。■パタカラ体操／魔法の言葉『パ・タ・カ・ラ』を使って口を大きく動かして脳に刺激を与え、認知症予防！■ラップ・ラップ体操／早口言葉や落語の寿限無をラップのメロディにのせて歌うことで手・眼・口・全身の運動機能を向上させる。
〒162-0801 東京都新宿区山吹町361
☎03-3268-2311 FAX 03-3260-5425
http://www.nanun-do.co.jp/

芸術生活社
【芸生文庫】
高齢期を快く生きるための“人生の道しるべ”
老春謳歌（ろうしゅんおうか） 長生きの秘訣
御木徳近著
パーフェクト リバティー教団第二代教祖が、宗教家として悟りと長い人生経験、多くの人との出会いから、高齢期を心豊かに暮らすための新しい生き方を提唱する。■定価700円（税込）
〒150-0047東京都渋谷区神山町16-1
電話03-3469-1153 FAX03-3465-6867

清文社
宗教法人の税務調査対応ハンドブック
〔宗教法人税制と法制の解説を含めて〕
石村耕治 編 A5判3780円
平成25年からの新・税務調査手続にも対応！
宗教法人と税務調査についての基礎知識を中心に整理し、コンパクトに解説した、実務家・宗教関係者必携の一冊。
公益財団法人 日本宗教連盟推薦！
〒101-0047 千代田区内神田1-6-6
☎03(6273)7946 FAX03(3518)0299
http://www.skattsei.co.jp〈価格税込〉

解脱会伝記編纂委員会編
新版 解脱金剛伝 全3巻
A5判 上製函装 定価3000円（税込み）
世相善導、人心救済への道筋を説かれた解脱会金剛（岡野聖憲）の生涯を全1549頁、3巻に収めた。会祖亡き後、その人格に触れて自らの内に深い帰依心を培い、世のため人のために生きるための学びの土台となる書。第1巻＝生誕から事業の失敗、大成を経て宗教の世界に目覚めていく前半生を描く。第2巻＝昭和4年に立教して以来、人心救済の道一筋に生き、教えの土台を完成するまでの事績を辿る。第3巻＝戦時下の厳しい時代の中で縦横無尽に教えを説き、救済活動を展開し、遷化されるまでの歩みを記す。
解脱会
〒160-0007 東京都新宿区荒木町4番地
TEL 03-3353-2191(代表) Fax 03-3353-3055

北陸 結成60周年記念集会を開催

記念講演 設立の精神に基づき憲法を注視

北陸総支部（森岡克修会長）は5月27日午後1時から、石川県能美市の根上総合文化会館で「60年の絆―世界平和に向けて新たなる誓いを」をテーマに結成60周年記念集会を開催した。

開会に先立ち、オープニングでは立正佼成会やパーフェクト リバティー教団（PL）の子どもたちによる「子供太鼓」や「バトントワーリング」が披露された。平和の祈りに続き、森岡克修会長があいさつ。森岡会長は「60年の歴史において、先師先達に感謝します」と述べた上で、新宗連のスローガンに触れ、「信仰心を広め、深めていくことがこれから大切になる。宗教は異なれども、求めるものは一つ。これからも協力し、邁進して行きたい」と力強く述べた。この後、保積秀胤新宗連理事長のメッセージが代読され、DVD「新宗連の歩み」が上映された。

休憩の後、講師に山田匡男新宗連総局長を招き、「憲法改正と国民投票に関わる諸問題」をテーマに記念講演を行った。山田総局長は「新宗連の設立の意義として『信教の自由を守る』と『絶対非戦』を宣言してきた」とした上で「私たちはその精神に基づき憲法について注視していかなければならない」と述べた。

また、憲法問題は難しいと思われがちな風潮について指摘し、「知らないではいけない。正しく理解していただくためにもこの学習会は重要」と学習会の必要性を力強く訴えた。

学習会終了後、高橋享久北陸総支部事務局長が謝辞を述べ、最後に北陸総支部の役職者が壇上に上がり、参加者と共に「いのち輝く」を合唱した。

参加者とともに「いのち輝く」を合唱

新宗連 総支部協議会

藤井庸佐氏を新会長に選任

近畿

近畿総支部は4月25日午後2時から、大阪市の立正佼成会大阪普門館で平成30年度総会を開催した。

平成29年度事業報告案、同決算案について審議し、原案通り承認。続いて役職者について協議を行い、新たに円応教責任役員の藤井庸佐氏を会長に選任した。

藤井庸佐氏

この後、来年度の新宗連全国総会の受け入れや平成30年度平和学習会について審議。全国総会は専門委員会に意見の集約を付託し、平和学習会は今年9月27日に総務会と併せて実施することを確認した。

総務会終了後、山田匡男新宗連総局長を講師に招き、「緊迫する北朝鮮情勢と拉致問題について」をテーマに学習会を行った。

大阪「キタ」の歴史学ぶ

大阪　第11回テーマ学習会

大阪府協議会（浜田真起議長）は5月25日午後1時半から、大阪市内で「第11回テーマ学習会」を開催した。今回は「大阪ウメキタの今昔物語―大阪市北部を歩く」をテーマに、大阪市立大学非常勤講師で国際日本文化研究センター客員准教授の吉村智博氏を講師に招き、大阪「キタ」の歴史を学んだ。

今回、視察する「キタ」の地域は大阪三郷（天満組・北組・南組）と称された市街地の周縁部に位置し、マイノリティのコミュニティであったが、近代化とともに工場や簡易宿が形成されていた地域であり、淀川改良工事と縁の深い場所。

以前の淀川は、川幅が狭く蛇行している上に、大阪の中心部を流れていたため、いったん洪水が起こるとその被害は甚大だった。1885（明治18）年の洪水をきっかけに、淀川改良工事が始まり、多数の住民が移転を余儀無くされたという。

講義の後、吉村氏を先頭に梅田・中崎町・天神橋筋界隈を実際に歩き、「綱敷天神社」を見学後、中国街道を北上し、中崎町にある「済美小学校跡」や「舟場地区」を見学した。

この地区には淀川改良工事で集落が水没するために、中津村から移転を余儀なくされた人々が住んでいた。また東海道線のお陰で大阪大空襲の戦火の延焼を逃れ、約100年間の建築様式が混在している場所でもある。一行は、1階が格子戸で、2階がタイル張りの壁面をもつ町家や、類焼防止のための防火壁を設えた商家など1920年代の防火建築を見学した。

続いて、大阪七墓（梅田・浜・葭原・蒲生・道頓堀・小橋・鳶田）の一つである「旧浜墓所（現・市設南浜霊園）」を見学し、さらに「北市民会館跡」から「大淀寮」「豊崎東会館」「長柄墓所（現・市設北霊園）」まで足を伸ばした。

学習会終了後、講師を交えて懇談会を行い、感想を語り合った。

済美小学校跡を見学

高野山金剛峯寺で学習

滋賀　教団訪問研修を実施

滋賀県協議会（左藤滋光議長）は6月19日、和歌山県高野町高野山で教団訪問研修を行った。今回は高野山真言宗の総本山・金剛峯寺などを訪問し、歴史的建造物の見学や高野山真言宗の教えや奥之院の信仰について学習した。

一行は午前11時に金剛峯寺に到着し、社会人権局長の佐々木基文氏から歓迎のあいさつを受けた後、金剛峯寺内を2グループに分かれて見学した。

午後からは中之橋から奥之院に参進し、御供所で奥之院維那（いな）の仁賀大善氏から講義を受けた。「維那」の役目は、弘法大師（空海）が今も修行を続けていると言われている奥之院の御廟に、御供所から毎日食事を運ぶ務めにある。維那の仕事の内容のほか、仁賀氏の修行中の体験や、1983（昭和58）年から関わっていた寺院復興の体験談を拝聴した。辛い修行中は何かあったら御廟にお参りし、悩んで参道を歩いても、参拝後は力がみなぎる経験をしたり、廃仏毀釈によって寺がなくなった場所に、一から堂宇を建てて寺院復興に奔走していた際も「大師堂に参拝することで力をいただけた」と語り、信じることの大切さを語った。

また、弘法大師は高野山に入定し「日々の影向を闕（か）かさず」として、「形を変えて我々を救ってくれる」と、弘法大師の守護があることも語った。

一行は玉川に掛かる御廟橋を渡り、燈籠堂を参拝。根本大塔と金堂、弘法大師が投じた三鈷杵が引っかかった「三鈷の松」なども見学した。

維那の仁賀大善氏が講義

大宗連総会 記念講演会

「謂れなき差別」の歴史とは

同和問題に取り組む大阪宗教者連絡会議（大宗連、若林正信議長）は6月14日午後2時から、大阪市西区の金光教玉水教会玉水記念館大ホールで「2018年度総会」を行った。

若林正信議長（金光教）の開会あいさつ、来賓あいさつの後、議案審議に移り、2017年度の事業報告・決算報告・監査報告を可決。続いて、2018年度の事業計画・予算案が審議され可決した。

この後、元三重県人権センター嘱託職員の味岡一博氏が「謂（いわ）れなき差別は、どのようにしてつくられたのか」をテーマに記念講演を行った。

味岡氏はテーマにある「謂れなき」について説明し、「『謂れ』とは、『いつ・どこで・どのように』のことだが、その謂れがあっても差別は絶対にいけない」と前置きした上で、「現在でも存在する差別をなくすためには、その謂れを正しく知ることは重要です」と述べ、差別の歴史をひも解いた。

差別は平安時代後期に始まる京都での風習が原因として、それは人の死や、自然災害、社会不安などの突然起こる不幸な出来事を「ケガレ」、その原因を払うための行為が「キヨメ」であると述べた。ケガレの語源は「気枯（か）れ」で、突然起こる不幸な出来事で「気が枯れる」がなまってできたと説明した。

当時は目に見えない悪霊がケガレをもたらし、ケガレに近付くと悪霊が移って不幸になると信じられ、「それを取り除くキヨメという儀式をする人が必要になった」とした。

そして、この時代に自然災害や流行病などで住む場所をなくし、年貢などの税がかからない河原に移り住んだ農民などを危険視し、都の外に追いやって「人里（ひとざと）（都）に非ず」として「非人」と呼んだ。そして、彼らを自由にさせる代わりに都の警察業務やケガレをキヨメる仕事をさせた。当初は、このような業務に就く者に感謝と畏敬の念を持っていたが、「時代が下り、非人に近付くと悪霊が移り『ケガレる』と恐れ、差別するようになった」と差別の始まりを説明した。

最後に「豊臣秀吉が検地帳を作成して身分を固定し、それが江戸時代に受け継がれ、現在に至っています」と述べた。

味岡一博氏

【諸会議 報告】

公開講座を振り返る「公式参拝」意見書で意見交換

信教委

新宗連信教の自由委員会（信教委、本山一博委員長）は5月25日午後1時から、東京・四谷の解脱会本部で第29期第9回委員会を開催した。

3月9日に開催した「第5回現代社会と信教の自由公開講座」の振り返り、「信教の自由」をめぐる最近の問題について共有した後、首相・閣僚による靖国神社「公式参拝」に関する意見書提出について意見交換を行った。続いて、第30期の役職者について協議を行い、力久道臣委員を委員長に、鈴木裕治委員を副委員長とすることを申し合わせた。

委員会の後、一行は靖国神社を訪問し、小堀邦夫宮司と意見交換を行った。

理事会へ向け決算報告案、資産運用規定案など協議

会計委

新宗連会計委員会（会計委、中村憲一郎委員長）は5月30日午後1時半から、東京・代々木の新宗連会館で第29期第7回会計委員会を開催した。

6月12日の決算理事会へ提出する「平成29年度決算報告案」「新宗連資産運用規定案」などについて協議した。

「第9回沖縄慰霊平和使節団」派遣概要について意見交換

新宗連青年会

新日本宗教青年会連盟（新宗連青年会、宮口弘道委員長）は6月4日午後2時から、大阪市の立正佼成会大阪普門館で平成30年度第2回委員会を開催した。

諸報告の後、第53回「戦争犠牲者慰霊並びに平和祈願式典（8・14式典）」と「ユースフォーラム2018」の進捗状況や詳細について確認、意見交換を行った。

続いて、来年2月頃に派遣予定の「第9回沖縄慰霊平和使節団」について協議。委員会に先立ち、午前11時から開催した実行委員会で作成された派遣概要（ねらいや行程案）について意見交換を行い、大枠を承認した。

この後、11月に開催予定の「第7回青少年育成セミナー」について協議。内容については、現在の宗教をとりまく状況を踏まえて意見交換を行うことを申し合わせ、8月13日に開催する次回委員会に併せデモンストレーションを行い、詳細について検討することとした。

平和学習会―2総支部と7協議会が開催

全国の総支部・協議会で開催している「憲法改正と国民投票」をテーマとする平和学習会。5月26日から6月29日までは、以下の2総支部と7協議会が開催した。

5月は北陸総支部（27日、能美市、講師＝山田匡男新宗連総局長）、青森県協議会（31日、八戸市、講師＝種田和敏弁護士、栗山隆夫新宗教新聞編集長）。

6月は福島県協議会（2日、郡山市、講師＝種田弁護士、大滝晃史新宗連事務局次長）、九州総支部（3日、筑紫野市、講師＝伊藤真弁護士、佐原透修新宗連事務局長）、岐阜県協議会（5日、岐阜市、講師＝山田総局長）、十勝地区協議会（17日、帯広市、講師＝山田総局長）、秋田県協議会（同日、秋田市、講師＝伊藤弁護士、佐原事務局長）、群馬県協議会（18日、高崎市、講師＝伊藤弁護士、佐原事務局長）、徳島県協議会（24日、徳島市、講師＝梶山貴史新宗連大阪事務所主任）。

叡智の会 第14回講演会―千玄室氏が茶道の精神語る

一期一会、わび・さび、和敬清寂など解説

兵庫県宗教連盟の有志による「叡智の会」（濱田諭稔会長）は6月11日午後3時から、兵庫県神戸市の立正佼成会神戸教会で「第14回講演会」を開催した。

裏千家の大宗匠・千玄室氏が「一盌からピースフルネスを」をテーマに講演。海軍に徴兵され、特攻隊に配属された過去を語り、陣中で茶を振る舞い、「生きて帰ったら、お前の茶室で茶を飲ましてくれるか」と語り帰ってこなかった仲間、また茶を自らたて「一期一会」と書き残して散っていった仲間の話など、壮絶な体験を話した。

「最近は（茶道の言葉である）『一期一会』が軽い意味で使われているが、彼は本当の意味が分かっていた」と述べ、二度と繰り返されない、一度きりの出会いとの重い意味合いで、一回の茶席に「これが終わったら死んでもいい」と思えるほど、真剣に向き合う覚悟が必要と説いた。

そして、日本は「情」の文化であり、日本人は皆「思いやり」を持っていたが、「最近それがくつがえされている」と述べ、戦後、「間違った民主主義」のために家族、家庭が分散し、「自分たちの生活だけを楽しんでいる」個人が増えたと指摘。茶の湯は人格を高め、思いやり、もてなしを学ぶ場であることを説き、「わび・さび」は特別な世界のことではなく、「自然の世界」と解説し、様々な作法も当然のエチケットであり、難しく考えるべきではないと話した。

また、先祖にあたる千利休が禅宗であることから、禅宗の仏壇を祀ると同時に、自宅の敷地内には多くの神道の神々を祀っているという。千利休の弟子にはキリシタン大名も多くいたことにも触れ、自身もキリスト教の神への祈りも日々行うと述べ、さまざまな宗教実践を差別なく行っていることを披歴した。

茶の湯の精神にも差別や区別があってはいけないことを教えていると述べ、茶室への入り口が狭いことについては、刀を差しては通れないつくりになっていることを教えていると話した。

そして、千利休の説く「和敬清寂」が大事であるとし、老人であればあるほど、「にこやかに夫婦円満でなければならない」と参加者に呼びかけた。

講演後、兵庫県知事の井戸敏三氏、神戸市長の久元喜造氏が祝辞を述べた。

千氏は日本の文化、禅の教えなども語った

第12回 全国空爆犠牲者慰霊祭

大慧會教団

大阪府堺市の大慧會教団（石倉寿一次代会長）は5月27日午前10時から、兵庫県姫路市の手柄山公園にある太平洋戦争全国戦災都市空爆死没者慰霊塔前で「第12回全国空爆犠牲者慰霊祭」を執り行った。

玄題三唱、献香、献茶に続き、水谷良彦姫路法明館館長が「御霊に捧げる言葉」を言上。この後、石倉寿一次代会長と4人が代表献花、一堂で合掌礼拝し、大乗経典の奉読を行った。

続いて、姫路法明館の有志が、スペイン・カタルーニャ出身のチェロ奏者で国連平和賞を授与したパブロ・カザルスの「鳥の歌」などをハンドベルで演奏。神に、「毎日の経典読誦の際に、一心に祈らせていただくことが私たちの使命であると思います」と語った。

カタルーニャの鳥はピース、ピースと鳴くのです」と語り、カザルスが国連本部で演奏（1971年）したエピソードを語った後、犠牲者の御霊に音楽を捧げた。

石倉次代会長があいさつに立ち、教団としての式典は年に1回だが、50万人を越える空爆犠牲者だけでなく長崎・広島の原爆犠牲者、沖縄戦の犠牲者や今なお続く紛争で苦しむ方々に対して、

また、天寿を全うせず亡くなった戦争犠牲者の言葉として、「身分を忘れる」ようにできていると指摘。茶室では皆が平等であり、地位は幻であること、禅の教えである「一無為の真人」となるべきことを教えていると話した。

先祖供養と世界平和実現が私たちの使命

姫路市・手柄山公園で執り行う

石倉次代会長（中央）らによる献花

「私たちの使命である先祖供養と世界平和の実現に邁進させていただきたい」と呼びかけた。

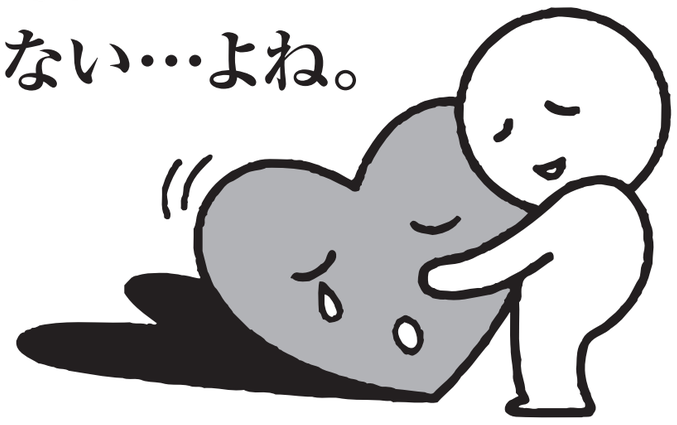
開会に先立ち、恒例のクリーンアクションが行われ、慰霊塔前の草取り清掃を行った。

ならない憤りや無念さなどに思いを馳せ、慰霊によるほかできないが、鎮魂しかできない

ひとりで悩まず電話して！
ホントにつらい時って誰にもいえない…よね。

●必要に応じて面接をしています。
●手紙でのご相談にも応じています。
●秘密は守られます。
●相談は無料です（通話料はかかります）。
●金銭的な援助はできません。
●医療・法律・教育関係の助言や指導は、専門家にお願いします。
●特定の思想・宗教・政党などとは一切関係ありません。

●東京自殺防止センターは国際ビフレンダーズの一員です。
●私たちは国際ビフレンダーズ憲章に沿って活動しています。



NPO法人　国際ビフレンダーズ
東京自殺防止センター
03-5286-9090
年中無休、夜8時から翌朝6時まで
火曜のみ午後5時から翌朝6時まで
〒169-0072　東京都新宿区大久保3-10-1 日本基督教団シロアム教会内
事務局電話番号　03-3207-5040（FAX 03-3207-5098）

●全国にある他の自殺防止センター
国際ビフレンダーズ 大阪自殺防止センター　06-6260-4343　毎週金曜、午後1時から日曜、午後10時まで
国際ビフレンダーズ 宮崎自殺防止センター　0985-77-9090　毎週日曜・月曜・水曜・金曜、午後8時から午後11時まで
国際ビフレンダーズ 岩手自殺防止センター　019-621-9090　毎週土曜、午後8時から午前4時まで
国際ビフレンダーズ あいち自殺防止センター　052-870-9090　毎週金曜、午後8時から11時まで

未来へ向け 百年に感謝

「立教百年祭」を5回にわたり挙行　松緑神道大和山

祭主の田澤教主が祭文・祝詞奏上の後、満堂の参列者に清祓を行う

「神人和成」で世界平和を
来賓集い 宗教協力称える

6月9日

松緑神道大和山（田澤清喜教主）は今年立教100年を迎え、6月2日から23日まで5回にわたり、青森県平内町の大和山本部で「立教百年祭」を挙行した。2回目にあたる9日には教団と所縁（ゆかり）の深い比叡山延暦寺、新宗連、諸宗教団体の代表らが参列。宗教協力、世界平和に専心する教団の功績を称えた。

9日午後2時から神集閣大ホールで開催された立教百年祭・記念祭儀は、信者で満堂となった中、開式。鈴木武幸代表総務が式辞を述べ、教団が「立教百年祭」のスローガンを「光かがやく未来へ」、サブスローガンを「ありがとう百年―伝えよう信仰の喜びを」と掲げ、2年前の立教98年から立教102年までの5年間を奉祝期間と定め諸事業を展開していることを報告。特にこの奉祝期間に「一人でも多くの信者が聖地を訪れ、御両祖教主（教祖、教祖令室、歴代教主）に感謝を捧げ、神様と共に生きる決意を固めていただきたい」と呼び掛けた。

この後、祭主の田澤清喜教主と御神具が入場。厳かに修祓と招神の儀、献饌が行われ、参列者一同で聖歌「祈りの歌（一）」を奉唱した。

田澤教主が神前に進み、祭文と祝詞を奏上した後、参列者に向かい清祓を行った。来賓玉串奉奠を、第二五七代天台座主名代の毘沙門堂門跡門主の叡南覚範氏と、日本宗教連盟理事長で神習教教主の芳村正德氏、新宗連理事長で大和教団教主の保積秀胤氏が行った。

この後、宗教界代表らの玉串奉奠が続き、新宗連加盟教団では深田充啓円応教教主夫妻、庭野日鑛立正佼成会会長夫妻、岡田光央崇教真光三代教え主、江口陽一大法輪台意光妙教会理事長、石倉寿一大慧會教団次代会長、新井光興救世真教会長、力久道臣善隣教教主、本山一博玉光神社宮司、田中庸仁真生会会長、出居德久修養団捧誠会総裁、加納理孝加納太霊教院院長、川端健之立正佼成会理事長、齋藤賢一郎妙智會教団理事長、渡辺孝彦解脱会理事長、内島康親思親会事務局長。また新宗連の山田匡男総局長、斎藤謙次総局長補佐、佐原透修事務局長が行った。この後、昇神の儀、祭主並びに御神具が退場し閉式となった。

田澤教主が再び入場し、「ご垂教」。多くの神典の中から特に「大神條（たいしんじょう）」を挙げ、「上は定めて守るべし」「心を清く磨くべし」「吾心（ごしん）を磨けよ」などの條文を参列者と共に奉読した後、解説。生活の中に必ず教えを活かすことが神様の願いであることや、信仰を次世代に継承するためにはまず子どもの前で祈りの姿を示すこと、神様は肩を落として落ち込んでいる時も前を向き進んでいこうとする信者を望んでいることなどを、自身の体験を交えわかりやすく説いた。

そして百年祭にあたり揮毫した「神人和成（神と人と和して成す）」について解説。教祖が悟った言葉の引用であることを述べ、「立教百年にあたり、神様と人と一緒になり、私たち信者は理想実現のため、世界平和を目指し進んでまいりましょう」と力強く呼び掛けた。

直会では、来賓らが特設ステージに登壇し鏡開き

野外特設会場で直会
来賓らが「鏡開き」

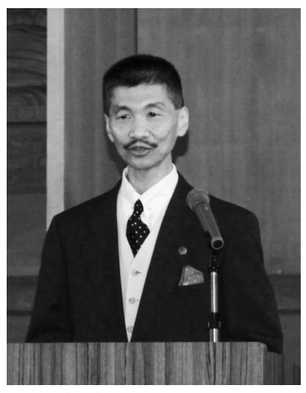
小憩の後、屋外の特設会場で直会が催され、来賓を代表し、毘沙門堂門跡門主の叡南氏と立正佼成会の庭野会長が祝辞。叡南氏は、教団が比叡山に「不滅の法燈」の菜種油と千日回峰行者のための草鞋（わらじ）を毎年欠かさず奉納していることへの感謝を述べた。

庭野会長は田澤康三郎初代教主、田澤豊弘二代教主、そして田澤清喜教主の新宗連の宗教協力への尽力を、エピソードを交えて称えた。

「鏡開き」は教団名入り祭り半てんを羽織った田澤教主はじめ来賓ら20人が特設ステージに登壇し、「寿立教百年」の前垂れを付けた酒樽に、掛け声と共に威勢よく槌を振るうと、会場からは大きな歓声と拍手が沸き起こった。

乾杯の発声を比叡山延暦寺の小堀光實執行が行い、歌謡や法楽音頭、ねぶたの運行などが続き、万歳三唱で盛況の幕を閉じた。

日々の祈りの大切さを説く
発会77周年記念式典　修養団捧誠会


祈りや幸せ、平和について説く出居総裁

修養団捧誠会（出居德久総裁）は6月17日午前11時から、東京・池袋の本部平和郷で「発会77周年記念式典」を挙行した。同教団は、さまざまな修養団体を結成し活動していた出居清太郎教祖が1941（昭和16）年6月、財団法人修養団捧誠会を結成、専任講師に就任したことに始まる。

式典は出居德久総裁が入場し、開式。出居総裁が神前に額（ぬか）ずき、「いのりのことば」を奏上した。教団役員らによる「教祖礼拝の詞」「神法」「綱領並びに典範」の奉読の後、参列者一同で「教祖讃歌」を斉唱した。

早山徹会長の式辞、祝電披露の後、出居総裁が登壇し「あいさつ」を述べた。

出居総裁は毎日の平和への祈りを嘘（うそ）偽りなく行い誓うことから、教祖が願う平和と光が見えてくるとして、「日々の祈り」の大切さを説いた。また「人の幸せを祝福し、共に分かち合う中にこそ、真の幸せと平和がある」と述べ、すべての人々の幸せと平和のため歩むことを呼び掛けた。

この後、「明日につなぐ―志・出会い・感謝」のテーマのもと、高知支部の竹内克之氏が体験発表を行った。竹内氏は関西の大手食品会社の相談役。創業者の祖父が出居教祖と出会い、薫陶を受け、三代にわたり会社運営及び社員育成に「み教え」を活かし発展してきたことを振り返った。

悠久世界平和の礎はアジアからとの思いから、東南アジアでの経済発展のための諸事業、学校支援なども展開していることを説明した。最後に「捧誠会誠歌」を参列者一同で拝唱し、閉式した。

式典の後、祝賀懇親会を行い、閉会後にはダンスパーティやカラオケなども企画され、発会を祝った。

世の中を変えていく信仰に
第71回立教記念大祭　善隣教

善隣教（力久道臣教主）は5月20日午前10時から、福岡県筑紫野市の本庁聖堂で「第71回立教記念大祭並びに善隣の園大祈願祭」を挙行した。

全国の教会御旗が入場した後、開会。献饌、御奉膳献納、救顕行参拝名簿の献上、立教の地の「御神火」「御神水」を献上した後、力久道臣教主、力久美雪継主が入殿し着席。力久教主が内陣の「救世源霊の炎」と「立教の地御神火」を妙合した「大祭御神火」が点火された。

この後、「大祭御神瑞妙号」を行い、神殿を荘厳した後、力久辰斎教祖（御神尊様）を祀る神殿前に進み、祭文を奏上した。

神殿の「御神尊様」の「御神像（みすがた）」が「御開顕」され、力久継主が金の水玉、力久教主が青白の幣（ぬさ）を奉持し場内を一周（写真）。外陣に戻った後、力久教主による「御慈光照射」が行われた。信徒は合掌し、一心に「天地一切一心正念経」と「御璽経」を唱えた。

「信条五ケ条」「善隣教信仰標語」を唱えた後、「救顕行みうた」を奉唱した。続いて力久教主と力久継主、武広茂樹理事長、教主夫人、力久隆積聖主婦人、教会長、信徒、来賓の代表が「捨身誓願の松」を奉奠した。

この後、立教記念大祭表彰式、祝賀式が催され、武広理事長が式辞を述べ、信徒、来賓の代表者がそれぞれ祝辞を述べた。

力久教主が「お言葉」。「めざせ御神化50年」というスローガンの元、善隣信徒としての信仰心を高めていこうと指導。また教団が40数年、在韓被爆者の支援活動を続けていることに触れ、「もう二度と戦争による被害者を出さないという国づくり世界づくりが御神尊様から頂いた善隣信徒の大いなる使命である」と述べた。

さらに「個人的な願いをかなえる信仰から、世の中をより良く変えていく信仰に高まっていかなくてはならない」と力強く語った。

「御霊殿天水妙号の儀」が執り行われ、「祈願札」が献上された後、「天水」へ「祈念水」が妙合された。

午後2時からは「世界平和祈願札入魂の御祈り」が行われた。力久教主は「お言葉」で日常生活において教えのままに堂々と生きていく「和の実践者」になっていくことが世界平和への一歩であると述べた。そして「信仰を頂く喜びを多くの人にお分けし、大いに精進を重ねて参りましょう」と呼びかけた。

78ヵ所で募金活動を展開
第39回全国統一行動デー　円応青年会

兵庫県丹波市の円応青年会（赤銅聖治会長）は5月27日午前9時から、「第39回全国統一行動デー」を実施し、北海道から熊本県までの78カ所で募金活動を展開した。

全国統一行動デーは、円応教（深田充啓教主）の教えの根本である「『世の中の道具』として働く」ことを実践する活動として、1980（昭和55）年から始まり、毎年、全国各地で青年信者らが街頭に立ち、体の不自由な子どもたちへの理解と協力を呼びかけているもの。

当日、赤銅聖治会長は兵庫県神戸市の王子動物園前から明石市のJR明石駅、姫路市のJR姫路駅前を回り、街頭に立つ信者らを激励し、共に募金活動を行った。また、円応青年会名誉会長の深田惠子恵主は三重県を中心に回り、自らも「肢体不自由児への愛の募金」と書かれたタスキをかけ、行き交う人々に募金への協力を呼びかけた。また、募金の趣旨と昨年度の募金額と寄託先が書かれたリーフレットも配布した。

行き交う人々に募金協力を呼びかけた（JR姫路駅前）

晴天ということもあり、人通りの多い姫路城やみゆき通りでは、両親からお金を受け取り募金する子どもや、外国人観光客からの募金も多く見受けられた。元気に協力を呼びかける子どもたちの姿に、足を止めて募金する人も多かった。

この日集まった浄財は、各都道府県の肢体不自由児協会をはじめ関係団体に寄託され、補助具の購入などに役立てられる。

先祖の浄霊を祈願
御聖旅祭　霊波之光教会

霊波之光教会（波瀬敬詞教主）は6月8日午前9時から、千葉県野田市の本部で「御聖旅祭」を執り行った。

「御守護神様」と尊称される波瀬善雄教祖は1939（昭和14）年6月8日、重病の体で、神仏の有無を求めて過酷な聖行（修行）に旅立った。御聖旅祭は、この聖行の意義を心に刻む日であり、教団の三大佳節の一つ。またこの日は、参拝した誰でも「先祖浄霊御祈願」を受けることができる。

開式を告げる太鼓が打ち鳴らされ、「二代様」（波瀬敬詞教主）が「三代様」（波瀬敬仁氏）を伴い、天使閣の「大神之御座」へ昇殿し、「御祈り」を捧げた。続いて聖神殿で理事代表と信者代表、役員代表が「御守護神様」「二代様」に対する感謝を捧げ、「三代様」と共に前進することを誓う「感謝文」を奏上した。この後、聖神殿参列者が玉串奉奠を行った。

続いて「三代様」と神子（みこ）による行列が、天使閣参道から聖神之池へ厳かに参進し、「三代様」が生命橋と浮流橋の上から神塩で浄める「聖神之池浄霊之御儀」を執り行った。

当日は午後4時まで、先祖浄霊祈願を行う参拝者が聖神之池に赴き、「生命札」を流し入れ、一心に祈願する姿が見られた。

また、神域内には「御守護神様」が愛育したさつき盆栽が見事に咲き誇り、参拝者の心をなごませた。

再建後、25年迎え
白金龍昇宮　建立記念式典　七曜会

東京都渋谷区の七曜会（眞塩陽一郎教主）は6月20日午前11時半から、東京都中野区の白金龍昇宮で「建立記念式典」を執り行った。

梅雨の雨の中、信者が集い思い思いのお供え物をし、準備を整えた。

眞塩陽一郎教主が開式前に、現在の場所に再建して今年で25年を迎えること、白金龍昇宮が太田道灌城趾に現れた白蛇を祀っていることから、「龍神様は雨をお喜びになっている」と述べた。

式典に移り、眞塩教主の導師で参列者が「七曜の信条」「光明の道」を奉唱し、「般若心経」を二度唱えた（写真）。この後、参列者一人ひとりが参拝した。

神の示した道標を生きる
教主誕生奉告祭 祝賀式典　大和教団

祝辞を述べる飯塚代表（左）も6月に誕生日を迎え、保積教主（右）と共に祝う

大和教団（保積秀胤教主）は6月10日午前10時半から、仙台市の大國神社・祈祷殿で保積秀胤教主の「誕生奉告祭並びに祝賀式典」を開催した。

保積志胤統理と祭司が入場、続いて保積秀胤教主夫妻が着座。祭儀に先立ち、七ケ浜町へ社会福祉基金の授与が行われた。

奉告祭では、来賓や教団役員らで満堂となった中、祭儀が厳かに執り行われた。斎主の保積統理が「教主様誕生祭詞」を奏上。神言、神語と神縁結歌の奏上の後、斎主と教主夫妻、参列者の玉串拝礼が続いた。

この後、祝賀式典。教主手渡された。この後、教主夫妻に教師や教信奉者らからの祝品、花束贈呈が続いた。

祝辞は土井亨復興副大臣、相沢みつや宮城県議会議員、北朝鮮による拉致被害者家族連絡会代表の飯塚繁雄氏が行った。

謝辞に立った保積教主は「大和教団は日本に生まれた宗教です。いや日本の神様がこうして歩みなさいと示した道標を生きる私たちです。大道（まさみち）であり、惟神の道です」と述べた。

また、米朝会談の報を受けて拉致問題の解決に向けた期待を述べた。さらに信徒に対して、現在教団を上げて取り組んでいる「靖国神社国民皆参拝運動」の趣旨と運動への協力、「笑顔のこぼれる家庭づくり」との目標に引き続き取り組んでいくことを呼びかけた。

の略歴の紹介、大泉鉄之助顧問の開会あいさつの後、社会福祉基金の授与式が行われ、宮城県仙台市と日本会議、日本盲導犬協会仙台訓練センター、北朝鮮による拉致被害者家族連絡会の代表者らに保積教主から目録が

新たな教団活動に向け邁進
開基109周年教祖祭典　加納太霊教院

加納太霊教院（加納理孝院長）は6月17日午後1時から、北海道深川市の本院・拝殿で「開基109周年教祖祭典」を斎行した。同祭典は加納包球教祖の生誕（1865年6月15日）祝賀と併せ、教祖の教えを引き継いで来た歴代院長の遺徳を称え感謝を捧げるもの。

はじめに筆頭理事の高田潔氏が開式の辞を述べ、加納理孝院長を斎主に修祓、修礼を行った。斎主が「教祖祭詞」を奏上した後、全参列者が「礼拝之詞」を奉読した。玉串奉奠では斎主と加納利佳院長夫人、来賓、理事役員らに続き、全参列者が行った。

午後1時45分からは「信徒総会」を開催。式辞の中で加納院長は1914（大正3）年、加納教祖が病に苦しむ人々の治病のために「霊魂療院」を開設した経緯を解説。歴代院長の功績を称えた後、「参拝した方々が常に安心して過せるように施設を整備し、円滑に運営していくのが院長の務めです」と述べ、新たな教団活動への抱負を語った。

来賓祝辞、祝電披露の後、加納院長が「教務報告」。来年に迫った「開基110周年」に向け、参道の整備、建物のバリアフリー化など、施設の改修を進めていることを紹介。

斎主の加納院長が「教祖祭詞」を奏上した

「皆さんの真心からのご協力をお願いします」と語った。この後、最高齢参拝者の発声により全員で万歳を三唱、新たな精進を誓い合った。

小憩後、「祝賀会」を開催し、祝宴余興や福引抽選会で会場は大いに盛り上がり、参拝者は和やかなひと時を過した。

12ヵ国47団体 のべ500人が参加
武力に頼らない安全保障を
第6回 9条世界宗教者会議 被爆地・広島で開催

「憲法9条による世界平和―被爆地ヒロシマから」をテーマとする第6回「9条世界宗教者会議」（主催＝「宗教者9条の和」などから構成される実行委員会）が6月13～15日、広島市中区の広島平和記念公園内国際会議場で開催された。アジアや欧米の12カ国・地域から仏教やキリスト教などの47団体、のべ約500人（各日170～180人）が参加した。

同会議は日本国憲法9条の「殺さない、殺させない」の精神を世界の宗教者と共有し、特に東アジア地域における正義と平和の世論を形成することを目的に2007（平成19）年から隔年で開催されている。東京、ソウル、沖縄、東京、大阪と続き、今回は9条の原点を確認する意味をこめ「世界で最初の被爆地」広島での開催となった。

初日の開会式では、NPOピースデポ共同代表の湯浅一郎氏が、「北東アジアの平和と非核兵器地帯実現のために」と題して基調講演。欧州での「ベルリンの壁崩壊」後も北東アジアでは冷戦構造が現存していることを指摘し、「今、そこから抜け出す道筋が見えてきた。軍事力によらない安全保障の枠組み作りが始まっている」と展望した。

次に、在日韓国人2世として広島市で生まれた朴南珠（パクナムジュ）さん（カトリック広島司教区観音町教会信徒）が被爆証言。女学校1年生の時に路面電車の中で被爆した経験を語り、「広島がなくなっていた。何の形もとどめていなかった」と振り返った。そして「熱い、熱い、助けてくれ」と苦しみながら大勢の人が死んでいった惨状を話し、「今、日本は平和で豊かだが、たくさんの命の上に築かれたものであることを忘れないでほしい」と語った。

翌14日から、国際共同声明に盛り込む内容を討議。日本が受けた戦争被害だけでなく、日本がアジア各地で行った戦争加害の歴史に向き合うことを求める発言が海外の参加者から繰り返しなされた。日本の参加者からも「どうして宗教者は戦争協力をしたのか。戦前・戦中の懺悔をしないとまた同じことを繰り返す」という発言が続いた。

また、同日夜は一般市民を招いて公開講座が行われた。

最終日となる15日、共同声明を採択。日本国憲法9条を「世界の平和実現の道しるべ」として北東アジアを非核兵器地帯にし、「武力に頼らない安全保障」体制を構築することを共通目標に掲げた。

この後、平和記念公園内の韓国人原爆犠牲者慰霊碑と原爆供養塔の前に移動し、「いのりの集い」を開催した。

韓国人原爆犠牲者に米国カリフォルニア州サクラメントの子どもたちが作った折り鶴が供えられ、供養塔では水を献じてから各宗教の祈りが捧げられた。

原爆供養塔前で「いのりの集い」を行った（15日 平和記念公園）

憲法改正問題と人権・平和を考える―
9条改正案を批判
日弁連 特別公演で課題示す

日本弁護士連合会（日弁連、菊池裕太郎会長）は5月29日午後6時半から、東京・霞が関の弁護士会館で、特別講演「憲法改正問題と人権・平和を考える―本当に『何も変わらない』か？」を開催した。

菊池裕太郎会長の開会あいさつに続き、日弁連憲法問題対策本部事務局長の川上詞朗氏が5月25日に開かれた、日弁連定期総会での自衛隊明記案と憲法改正手続き法に関する決議について説明。自衛隊明記案は、憲法9条が定める恒久平和主義の内実に実質的な変化を生じさせるおそれがあり、憲法改正手続き法は有料広告放送への規制が加えられておらず、最低投票率の定めがないことなどの検討がなされていないことから、同法の見直しを求めたことなどを解説した。

この後、テーマに沿い東京大学法学部教授の石川健治氏が特別講演を行った。石川氏は、1860年代のプロイセンで議会による軍事力統制が進んだ経緯を述べた上で、プロイセン憲法を規範とした大日本国憲法と、戦後の日本国憲法における民主的コントロールや軍（戦力）と財政、平和主義の考え方などを比較した。

その中で「現憲法の9条のメカニズムは軍事力の抑制にあった軍政と軍令、戒厳は消去され、財政論でのコントロールが記されていることをあらためて解説した。

自民党改正草案の自衛隊を明記する9条2項については、矛盾する内容で憲法条文の体をなしていないことや、立憲コントロールが失われ、個々の人権も脅かされる危険性を指摘。また、「統帥権条項」の復活につながるおそれがあり、自衛官は人間としての尊厳が損なわれる可能性があることも示唆した。

そして憲法改正には「まずどのような憲法にするのか、その精神を作ることが大切」「9条の持つ意義、重さをあらためて認識してもらいたい」と憲法改正に関する課題を示した。

石川氏が特別講演を行い、新旧憲法を比較し説明

清水雅人師を偲ぶ会
親交重ねた関係者が参列

「追悼の言葉」を述べる深田教主

5月19日逝去した、宗教ジャーナリストで「新宗教新聞」元編集長、新日本宗教青年会連盟（新宗連青年会）初代事務局長の清水雅人師を偲ぶ会が、6月28日午前10時半から東京・代々木の新宗連会館で行われた。主催は故人を慕う発起人7人。

偲ぶ会は故人の夫人、清水了子さんと娘の稚子さん参列のもと、山田匡男新宗連総局長の司会で開式。はじめに出席者一同で、故人を偲び黙祷を捧げた。発起人による追悼の祈りが捧げられ、元内閣総理大臣の鳩山友紀夫氏と元内閣官房長官の仙谷由人氏、深田充啓円応教教主、庭野日鑛立正佼成会会長、保積秀胤大和教団教主、岡田光央崇教真光三代教え主、力久隆積善隣教聖主（代理、力久道臣善隣教教主）の7氏が献花し祈りを捧げた。

「追悼の言葉」を鳩山氏と岡田三代教え主、深田教主が述べた。その中で深田教主は1970年代、自身が新宗連青年会委員長時代に実施した沖縄問題研究会、東南アジア青年平和使節団から、今日までの故人と60年近くにわたる交流を振り返り、「清水さんはかけがえのない友、兄弟、同志でありました」と声をつまらせ、突然の逝去を悼んだ。

続いて、テノール歌手の加藤ヒロユキ氏が「鎮魂歌沖縄の祈り」を捧げた。同曲は昨年、清水師が作詞し、加藤氏が作曲した沖縄戦で亡くなった戦争犠牲者に捧げる内容。

清水了子さんと稚子さんが献花した後、稚子さんが参列者に向かいあいさつ。資料が増え続ける故人の部屋から、「父は仕事好きで、まだまだ続けたかったのだと思います」と振り返り、参列者への謝辞を述べた。

この後、故人と交流のあった新宗連加盟教団代表はじめ国民民主党やマスコミ、「政教分離の会」関係者らの献花が続いた。

靖国神社の思想―
儒教・朱子学の影響を指摘
政教分離の会 公開学習会を開催

「政教分離の侵害を監視する全国会議」（政教分離の会、代表幹事＝木村庸五・古賀正義）は5月26月午後2時から、東京・代々木の新宗連会館で公開学習会を開催、「靖国神社の源流―歴史学から見たヤスクニ問題」をテーマに東京大学大学院人文社会系研究科教授の小島毅氏が講演した。

小島氏は中国儒教史の専門家で、靖国神社の思想的根拠は神道というよりは儒教にあったとの立場を明言している。講演では、はじめに靖国神社の歴史と性格について説明。大原康男國學院大学名誉教授や評論家の石平（セキヘイ）氏、湯沢貞靖国神社元宮司らの論文や著書に示された、靖国神社及び近代史に関する見解に対し、小島氏は批判を交えながら解説。靖国神社は創建の歴史からみて、国のためではなく天皇のために亡くなった犠牲者を祀る施設であり、「靖国」の字は中国の史書注釈書春秋左氏伝（しゅんじゅうさしでん）から採られたことなどを指摘した。

また、死者を神と祀る日本の「伝統」についても解説。死者を神としたのは平安、室町時代の早良親王や菅原道真らを祀った御霊信仰から始まり、後に豊臣秀吉や徳川家康らが神として祀られ、明治維新に伴い歴史上の「忠臣」らが神格化され、それが靖国神社の「英霊」と同質になっていった経緯を説明した。

さらに南北朝時代の平清盛や足利尊氏などを「逆臣」として貶（おとし）める発想は「古事記、日本書紀には見られないもので、中国の儒教から派生した朱子学の影響がある」と分析。江戸時代に確立していく「国学」には認識を統一して正統的な「国史」が定められたことを明かした。

その中で「人間そのものが神様になるのが日本神道の特徴」とする説には、「中国の儒教思想が見え、古代日本の律令国家がこれを取り入れた」と指摘。近代の日本並びに靖国神社の思想的根拠に儒教、朱子学が影響を与えたとの議論を展開した。

また、三原じゅん子参議院議員の「八紘一宇」発言や神武天皇陵はじめ天皇陵の問題などについても解説。質疑応答では朱子学・陽明学と日本の水戸学の関係、中国の天神地祇の考えなども説明した。

講演を行う小島氏

朱子学の思想資源が使われており、明治政府が西洋諸国を模倣し近代国家を建設するにあたり、国民統合のために歴史

多文化共生における宗教の役割・可能性・課題を検討
「宗教と社会」学会・第26回学術大会

「宗教と社会」学会（会長、平藤喜久子國學院大学教授）は6月9、10日、東京都足立区の帝京科学大学で「宗教と社会」学会第26回学術大会を開催した。大会は2日間、3会場に分かれて個人発表とテーマセッションが行われた。

個人発表は24人が9日午後零時半からと、10日午前9時半からそれぞれ行い、愛媛玉串料訴訟、日本における「エホバの証人」の展開などをテーマとする発表があった。

10日午後2時から、3つのテーマセッションが行われた。「現代日本の宗教と多文化共生」セッションは、2012（平成26）年に発足した同学会のプロジェクトの成果として出版された、高橋典史・白波瀬達也・星野壮編『現代日本の宗教と多文化共生』（明石書店、2018年）の内容をもとに発表が行われた。

趣旨説明を行った白波瀬達也桃山学院大学准教授は、「移民にとって、宗教が果たす役割は決して小さくないが、多文化共生に関する実践、討議、研究のいずれにおいても宗教は看過されがち」と指摘。「社会調査の成果から、多文化共生に関する宗教の可能性と課題を検討する」と述べた。

この後、理論的研究と事例研究の発表があり、事例ではカトリックとイスラームの事例がそれぞれ報告された。カトリックの事例を報告した大正大学専任講師の星野壮氏は、静岡県などの在日ブラジル人の集住地域のカトリック教会を事例として、教会内での多文化共生が一定程度蓄積されてきたことを報告。

星野氏は、もともとカトリック教会が多民族（マルチエスニック）な宗教組織であるという基盤を持ち、日本においては「少子高齢化に伴う会員数の減少の中、教会の生存戦略ともなっている」と分析。

一方、教会外の地域社会との多文化共生は端緒についたばかりであること、それは難民受け入れや震災、経済的低迷など、緊急時に立ち上がるものが多いが、継続的に行われるかどうかは「人による」ことなどを指摘した。

「現代日本の移民の宗教と多文化共生」セッション（10日午後）

多文化主義の限界を懸念
第36回宗教法制研究会・第76回宗教法学会

宗教法学会（理事長、大石眞京都大学名誉教授）は6月9日午前10時から、愛知県名古屋市の愛知学院大学で「第36回宗教法制研究会・第76回宗教法学会」を開催した。

午前の部は「寺院紛争」「宗教と税」をテーマに発表。午後の部で、大阪経済法科大学の山本健人助教は、カナダにおける政教関係と信教の自由論について、判例に基づき報告した。

続いて首都大学東京教授の谷口功一氏が、デンマークを中心にヨーロッパの多文化主義の限界をテーマに発表。谷口氏は2015年の「欧州移民危機」以来、デンマークでは社会保障費の増大により、排外主義が高まっていることを紹介。「極右と言われる勢力でなく、多文化主義を主張し、リベラルを自認する人々の中から、移民（イスラーム）排斥が主張されるようになってきた」と指摘し、イスラーム法と欧米の立憲主義（近代啓蒙主義）が鋭く対立しており、ヨーロッパ社会が立憲主義を守るために、非常な困難に直面しつつあることも説明した。

また、「6月5日に外国人の単純労働者を受け入れる骨太の方針が発表されたことは、日本社会にとって歴史的な変化」と述べ、日本も今後「移民」（外国人労働者）が増加するため、ヨーロッパで起こっていることが他人事では済まされないと、警鐘を鳴らした。

新刊紹介

平和憲法が平和への道、改憲は戦争への道
―わたしたちが核戦争の加害者とならないために
西山 俊彦 著

カトリック大阪教区の神父である著者は1935（昭和10）年に生まれ、戦争を体験した。本書では戦時下の体験も語られており、食べ物がなかったというよりも「食べ物にありつけたときが特別だった」、ラジオをひねれば流れてくる軍歌を口ずさみ、「連戦戦勝」の報道に「小躍りした」と述懐する。

戦争が終わっても食糧難は続き、苦労は耐えなかったという。「このような悲惨な体験を、今日の子どもたちと、明日を担う世界の人たちに運命として甘受させてはならない」と著者は言う。

著者によれば、現行憲法は「（戦争は）もうこりごりと痛感して制定」されたものであり、現在進行中の「憲法改悪」への動向に筆者は「深い憂慮」を示す。現行憲法の「ありがたさ」を実感できる土台には「悲惨な戦争体験」があったからだという。「戦争なかりせば」（戦争さえなければ）という思いを抱えながら、平和構築のために行動を起こしていくことを訴え、人権や平和は「絶えざる努力を続けた果てに現実となりうる理念である」と指摘する。

著者は「平和憲法を維持することは、なんと幸せなことでしょう。そして、この原理と達成課題をともにして、世界平和へと近づけることこそ、一人残らず神の子となる道であり、最高、最良の福音」と記す。「平和」とは「人間の本来的価値、人権が、例外なく充足された状態」「平和は、すべての人にとって、そして、すべての人に例外なく尊貴な本性が実現された幸せな状態」と定義し、これを保障する法的規制が憲法であるという。

戦争体験者である著者の言葉は重く、憲法改正が叫ばれている昨今、本書は平和や憲法の意義について考え直す一つの契機になる思われる。（文芸社 248頁 四六判 定価1512円）

近代化する金閣
―日本仏教教団史講義
藤田 和敏 著

日本有数の観光名所である京都の金閣寺（鹿苑寺）は銀閣寺（慈照寺）とともに、臨済宗（りんざいしゅう）大本山・相国寺（しょうこくじ）の山外塔頭（さんがたったちゅう）（傘下の寺院）である。本書は相国寺で行われた全10講の講義録で、相国寺の近代化の歩みをたどり、「教団」とは何かを明らかにしようとしている。

日本では7世紀の伝来以来の長い伝統を誇る仏教だが、本山を中心として本末関係による集権的な形での「教団」は江戸時代前期の1665（寛文5）年の「諸宗寺院法度」以降、段階的に成立していった。

従来、仏教は織豊政権期（織田信長、豊臣秀吉の時代）の仏教弾圧と、江戸時代の宗教統制によって「堕落した」（近世仏教堕落論）という見方が強かった。特に江戸時代は、宗派の組織化による支配の強化と引き換えに、仏教教団は寺領の収益と事実上の国教化によって保護を受けており、葬式仏教化によって信仰が形骸化したとされる。

しかし、著者は資料を丹念に読み解き、江戸時代中期頃まで、門派（法系）が根強く残っていたことから、必ずしも従来言われていたように世俗権力の介入で、中央集権的な「教団」が一朝一夕に成立したわけではないことを指摘する。

また、寺領からの年貢収入の減少、大火などにより、寺院経営は厳しいものであり、僧侶らの努力によって今日まで継承されてきたことも明らかにする。

本書は、著者の専門領域である江戸時代が中心となっているが、室町時代の相国寺の創建から近現代までをカバーしており、私たちが今日知る仏教「教団」が、歴史的にいかに成立したかを知ることができる。（法蔵館 299頁 四六判 定価2160円）